『論壇』一九五八年三月八日（朝日新聞社）

教育への悲惨な錯覚

不正入学の底にあるもの

矢口　新

毎年今頃になると年中行事のように不正入学の問題がさわがしくなる。慢性の神経痛のようなもので、季節になると起ってきて、また忘れられる。しかし症状は年と共に、だんだんわるくなるようである。

子供をよい学校に入れたいという日本の親の心は、誠に涙ぐましいものがあるようである。筆者の友人には、子どもの勉強のためというので、親が地方での要職をなげうって、親子もろとも東京へ引越して来ている人がかなり多い。学区を超えて隣の学校に通わせるくらい当たり前ではないかというのが、親の気持ちであろう。

きめられた学区の中には良い学校がない。あの中学校は、教員が組合運動ばかりやっていて、子供のめんどうを見てくれない。生徒の中には愚連隊と仲のよいのがいる。そんな学校へどうして大事な子供を入れることが出来ようか。

大体学区などというものを設けているのが間違いではないか。本人が寄留までして一生懸命勉強しようとしているのを、入れないというのはおかしいではないか。不正というのは何事か。これが多くの親の気持ちではないか。

筆者も子供をもつ親として誠にごもっともといいたいところもある。けれども、さてそのよい学校というのが本当によい学校かと考えると、これはまたちょっと首をかしげたくなる。あそこの学校に入ると、毎週模擬試験があって、うんと力をつけてくれる、先生も大変熱心です、などと親御さんたちがいうのを聞くと、もういけない。そういうのは教育にならないと筆者は自分の経験から確信している。だからよい学校よりは、普通の学校で当たり前の教育をしてくれればよい。試験準備でもまれるのは八割がたは役に立たないが、愚連隊に近いやんちゃな子供の中でもまれた人間は、将来働ける人間になる。そのほうがよいと思うのである。

一体日本人は学校に夢中になりすぎるのではないだろうか。そのくせ子供を育てる、人間として育てるということに、心を使わないのではないか。学校を出さえすればよいとしか考えていない、もっといえば、卒業証書をもらいさえすればよいのである。それは社会が免状を大事にするからだといわれている。その通りである。つまり、どこからどこまでも卒業証書だけで話が通るようになっている。卒業証が一生を支配するから、あだやおろそかに出来ない。子供の将来の社会的地位がきまると考えれば、あらゆる努力をしたいと思うのが親心であろう。

しかしそうしたことで、大事な青少年時代を受験準備だけで過してきた人間が出て来るとなると、これは困りものである。しかし受験準備教育は実は教育でないという認識は、残念ながら日本人にはないのである。むしろそれが勉強だと思っている。だから本当に教育を受けさせることになっていないにもかかわらず、それが子どもを教育することだと思っている。この全日本人的錯覚は悲惨である。そして試験準備のあおりを食らって、いまやほとんどすべての中学校や高校の普通課程が

そうなっている。これは極端な言い方で、それほどではないだろう思っている人が多いが、それこそ認識不足である。人間を育てようというような考え方は、学校では今や試験準備につけたりのこととしてあるだけなのである。

これを教育行政は何ともできないでいる。学校差をなくするなどというビホウ（弥縫）策が考えられたが、結果は逆になった。差をつけずにはおかない父兄のセンスの方が強いのである。妙な言い方だが学校差をなくするのでなく、教育差をなくすることが問題なのである。そこまでの徹底した考え方がなければ恐らく片づかないであろう。しかし事態はそこまで来ているともいえる。試験が終ったらすぐ忘れるようなそういう試験準備的学習をやっていて、教育にはなっていないのだから。しかし、こういっても、ここでもまたまさかそれ程でもあるまいというのが多くのひとの認識である。それが一番問題なのである。

日本人の教育観はもっと豊かになる必要があるということである。もっと様々な方式で、様々な形の教育をうけて、様々な人生のわたり方ができると考えなければならない。人生の現実はそうなのだが、それが見えないのである。そういう考え方で教育行政も一度学校大系をつくり直す必要があろうし、両親も考え直す必要があろうし、卒業生を雇う方もそうである。それが不正入学をなくする唯一の道で、急がばまわれだと思う。

（文部教官、国立教育研究所
教育内容第二研究室長）